The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	グローバリゼーションと言語文化教育
Author(s)	森, 祐司
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2002, 2001, p. 95-102
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77307
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

グローバリゼーションと言語文化教育

森　祐司

1．外国語教育は必要か

テレビを見ていた時のことだ。タレントが中国本土の美味いもの巡りをするようなグルメ番組であった。中三の娘が突然「あ～ぁ，中国語しゃべれるようになりたいなぁ…。わたし英語いっしょうけんめい勉強して上手になりたいし，大学行ったら中国語も勉強したいなぁ…。とうさん，大学って中国語もあるんでしょ？」と言った。高校受験の英語に手を焼いて，さっぱり単語が覚えられへんと嘆いている娘がである。

どうして？と訊いた答えは単純である。「だって，英語は国際語なんでしょ？先生も言ってたし…。便利だと思うし…それから，中国語は…ただねぇ…大人になったらかあさんと一緒に中国においしいものいっぱい食べに行きたいし，その時しゃべれたら便利でしょ…それだけ。」子供らしい漠然とした将来への期待と食いしん坊である。

私は大学で英語を教えているが，近い将来の外国語教育に対する妄想がある。少し回り道をするが聞いていただきたい。

『ドラえもん』というマンガを見ているとそこに出てくる数々の道具の発想に驚かされることがある。とりわけ「翻訳こんにゃく」には感心する。ドラえもんとのび太くんと仲間たちは様々な外国人や古代人，異星人や知性を持った動物や植物と出会うのであるが，最初彼らは言葉が通じない。困っていると取り出すドラえもんの道具が，この「翻訳こんにゃく」である。「翻訳こんにゃく，お味噌味ぃ～！」と言って「四次元ポケット」から取り出したこんにゃくのようなものをちぎって皆が食べると，なんと木までが日本語をしゃべり出すではないか。物語はそこから滑らかに展開していく。

小さい頃，マンガでヒーローが外国人と日本語で自然に話をしているシーンを見ていて，子供心に「んな，バカなぁ！」と感じ「英語じゃなきゃ通じんぞ！」とテレビに向かって怒っていた覚えがある。たとえばテレパシーなど，マンガやSFなどで使われる異言語間のコミュニケーションの問題を自然な筋立てで解消する手段は他にもあるが，『ドラえもん』の「翻訳こんにゃく」はすぐれもんだ。『ポカホンタス』というディズニーアニメでは，英国人ジョン・スミスの話す不可解な言葉に出会ったポカホンタスは，「耳を澄ませて心の耳で聞け」という柳の木の聖霊の教えを思い出し，突然英語を理解する。これも，自然との対話と異文化間コミュニケーションとを重ね合わせた含みのある手法ではある。ただし，この場面以前でもポカホンタスたちアメリカ先住民が英語を話し，表情やしぐさもブロードウェイの「ミュージカル」仕立てであるのは少々残念でもあり，また問題でもあるが。

「翻訳こんにゃく」を呑み込むことによって皆が日本語をしゃべり出す，という「日本語中心主義」をとやかく言うのはやめにしておこう。外国人は皆英語を話し，日本人の方が英語を使わねばならないと思った子供の私の心情についてとやかく言うことも，とりあえず後回しにしておこう。ここで私が考えたいことは，娘が成長し妻と中国旅行をする頃，はたして彼女は中国語をマスターしている必要があるだろうかという問題である。

飛行機を降り北京の空港に降り立った娘は，おもむろにバッグの中からイヤリングのようなものと襟元につけるちょっと大振りのブローチのようなものを２セット取りだし１組を妻に渡す。自分も耳と襟元を飾りながら，娘は今度は携帯用の MD プレーヤーほどの大きさの機械を取り出し妻に渡しながら，「かあさん，そこに付いてる小さなボタンの横に書いてある字読める？普通は「日常会話」ってとこにセットしておけばいいからね。レストラン行ったら「グルメ」ってとこにしとくといろんなこと訊けると思うよ…それからもし具合悪くなったら「緊急」ってとこの「病気」とか選べばそういう話が通じるからね…」と言う。妻は，「ほんと，大丈夫なの，これ…？」と怪訝そうである。

娘が取り出したものは，最近出回り始め，かなり手ごろな値段で購入できるようになってきた「携帯用自動翻訳機中国語版」である。イヤリングは小型イヤホン，ブローチには超小型マイクとスピーカーが内蔵されている。すべてワイヤレス。娘のバッグには相手に渡す小型イヤホンとマイクが 10 組用意されている。これで 5 メートル以内にいる人とごく普通に会話することができるのだとカタログには書いてある。残念ながら，会話表現はまだまだ限られているようだ。それに，たとえば，「この料理おいしいですね。材料は何ですか。日本では食べたことがないです。もう一皿下さい。…」といったように短文で入力する必要があり，相手にもできるだけ「子供に話しかけるように」話してくださいと頼む必要がある。しかし，たとえばパーティーでのテーブルトークやそれぞれの国の文化に関わるようなちょっとした「知的な」会話まで可能な機能はちゃんと備えている。うまく使いこなせるようになればかなりの実用性を発揮するらしい。

娘が家内と海外旅行を楽しむ頃（10 年ぐらい先であろうか）このような自動翻訳機が実用化されているかどうかは，専門家の意見も分かれるところであろう。しかし，たとえば英語のような人気のある言語の場合，「おはようございます」“Good morning”「お腹がすいた」“I'm hungry”「おやすみなさい」“Good night”　ほか 10 種類ぐらいの翻訳が可能な子供用おもちゃの発売を手始めに，ちょっとした会話を一方的に英訳するような機械はもうすぐに出回るであろう（もうすでに存在する）。私の考えるような両方向性の機能を備えた翻訳機も，「こりゃ駄目だ使いもんにならん」程度のおもちゃから始まり，みるみる開発されていくであろう。「翻訳こんにゃく」のような「完璧な」コミュニケーションを目指す必要はない。「とにかく通じればいい」のである。いわゆる「サバイバル・イングリッシュ」のレベルから「日常会話に事欠かない」ものまで，さらには，経済大国日本の復活をかけた「ビジネス・イングリッシュ版」，すでに多くプロの翻訳家に頼ることもあると聞く「国際学会発表用」の翻訳機までが揃うであろう。ディスクを交換することにより，たとえば，「免

疫学分野」「情報システム工学分野」「理論計量経済学分野」などのそれぞれの専門領域をカバーするバージョンが開発されていく。もちろん，各自のオリジナリティーを発揮できるようにあらかじめ自分で独自の表現を入力しておくことができる機能は不可欠だ。正確に情報を伝達することを主眼にした翻訳機をそれぞれの目的に合わせて開発することは不可能ではないと信じている。いろいろな内容の会話をしたい人は，様々な分野や内容の英語を収めたディスクをたくさん持っていけばいい。さらには，スイッチひとつで切り替えの効く大容量超小型機の開発も夢ではない。マルチリンガルの機種もできるであろう。

現在特に英語教育に求められているような実用性重視の傾向のうちのある部分は自動翻訳機の実用化によってほとんど無効となるであろう。私が小学生の頃，母は私にそろばん塾に行けと言った。1960 年代後半のことである。その頃そろばんはまだまだ実用的必要性を持っていた。父は就職すればそろばんが有利だと言って賛成した。しかし，いわゆる「電卓」の普及により事実上職場や家庭からそろばんが消えたのはいつの頃であったろうか。

英語のみならず中国語までマスターしたいと夢見る娘に対し，「う～ん，それはいいことだ。だったらしっかり勉強しろ」と答えた私である。「おまえが大人になる頃にゃあ英語を勉強するやつなんてほとんどいなくなるよ」などとはとりあえず口にするまい。「英語を実際話せるやつなんて，今と同じごく少数の語学のプロ，通訳なんかだけでよくなるのさ…あるいはな，ほら，ときどきテレビに出てくるような「暗算の達人」みたいに「スーパー人間勢ぞろいっ！」ってな具合になってるかもしれないよ，「わぁ！すっごーい！」なんてね…。普通は電卓が上手に使えればいいんだよなっ，それと同じさ…」

英語教師である私は，町にいくつもあった「そろばん塾」が激減していった姿にわが身を重ね，明日の不安に酒を重ねるのであった。

2．それでも私は生き残る！

語学教育に真剣に関わっている方々や外国語をしっかりと身に付けている方たちは私のこの妄想を聞いて，おそらく，一笑に付されるであろう。語学の習得とはそんなものではない。ただ単に買い物で値切ったり，通り一遍な自己紹介ができればいいのでないことは一目瞭然である。さらに，ある程度型にはまった商談の英語や，あるいは専門用語や理論の内容に対する理解が最も大切である国際学会などでの発表や論文の英語などは機械的に話したり書いたりできるなどと考える人は大した人物ではない。私がアメリカで勉強していた時，たまたまその地に来ている「有能な」日本人商社マンと日本料理店での会食で同席したことがある。知人（アメリカ人）の仲間が彼を招待した際，ついでに私も呼んでくれたのである。その頃はまだ経済大国日本を謳歌していたバブルの時代だった。和やかな会食の話題の中心はやはり日本の経済についてであった。彼の英語はまことに流暢だった。経済用語を駆使していかに日本が経済的に優れているかについて熱弁を振るった。

細かい点は忘れてしまったし，私にも分からない英語がいっぱい飛び出してきたと思う。ただ１つ印象に残っていることは，彼がしばしば“Japan is unique”を繰り返していたという

ことだ。日本経済は国際的にもユニークなシステムだということを強調したかったのだろう。“unique” は確かにいい意味で使う。しかし，執拗に繰り返されるこの表現に，私は，日本はそんなに変な国だったかなぁ，確かにそうだけど…と感じながら話を聞いていた。話題はいろいろな方面に及んだ。子供の教育の話，スポーツの話，ファッションの話（これは私も苦手だ）…。彼のことが気になり，ちらちらと目をやりながら皆と歓談していた私であるが，彼はその間，久しぶりの日本食だったのだろうか，ほとんど会話に参加することなく，おいしそうに口に箸を運んでいた。彼は経済と日本食しか口にしない。

「エコノミック・アニマル」という表現はその頃もうすでに死語となっていた。しかし，私は，彼のように「有能」な日本人商社マンたちが見事に成立させる商談のおかげで日本経済がここまで成長してきたのだなと感じると同時に，彼のような「語学に長けた」商社マンたちが「日本人は金のことばかり考えている」といった有難くない国際的イメージを作ってきたのかな，とも感じていた。その頃大学でいわゆる「教養英語」というものを教え始めていた私は，言語の背景にあるいわゆる文化的側面を理解することがコミュニケーションにとって大切であるという中学校の学習指導要領にもある語学習得目標の１つの大切さを痛感した。やたら話せるばっかりに変な誤解が膨らむこともある。

阪大の先生方と話していて，時々だが，さすがだなと思うこともある。たとえば，本年度私の英作文の授業（卒業要件にはならない高学年向けの授業）を聴講していた医学部の助手の方である。まことに英語ができる。論文はもちろん英語。聞くところによると研究中のメモも勉強のため極力英語でつけるようにしているらしい。海外の研究者たちとは当然英語でメールのやり取りをする。参考までに見せていただいた英語の文章はまったく問題なし。「ならばどうして私の英語の授業などを受けようと思われたのですか？」と訊きたくなるのも道理である。彼曰く，「学会などでの英語の発表にはまず問題はない。質疑応答についても，専門的な内容についてならまずまずOKである。しかし，ネイティブ・スピーカーの発表や論文には，いわゆる「味」が付いている。つまり，微妙なニュアンスや言葉の彩があるのだ。もちろんそれは本質的なことではないのかもしれないが，外国の研究者とのコミュニケーションにおいてはとても重要なことだと感じている。」参った。彼はパーティーなどの日常的なコミュニケーションにまで言及した。彼の求めていることを私なりの表現で言えばこうであろう。言葉というものがある程度その人の「人格」のようなものを表すとすれば，言葉が話せるということの理想は我々が母語（母国語）で表現することができるのと同じように外国語でも話せるようになることだ，あるいは逆に，相手の話す外国語がそのように理解できるということだ。（彼にはこの点でも脱帽だ！）学部生や院生に対して将来の専門分野の研究に少しでも役立つようにと「論文の書き方」のようなことを意識して授業をしようとしていた私は，専門の知識がない私がそんなことをすれば「百害あって一利なし」であることを痛感すると同時に，今我々に求められていることの本質を理解した。彼は絶対優れた研究者になる。

話を私の妄想に戻そう。自動翻訳機の開発が進む。皆が持ち運べるようになって利便さ

はますます高まる。我々は，もはや，語彙を習得したり文法を覚えて文を組み立てる訓練から解放される。さらには，発音を矯正したり聞き慣れない音に耳を慣らす苦労も必要なくなる。学校に通う同じお金で機械を購入すればいいのだ。通訳を雇う必要もなくなるのだ。入試問題から単語の意味や文章の意味を問う問題は消える。携帯辞書があればそんなものを覚えておく必要はない。電卓があれば足し算すらできなくてもいいのだ。確かに外国語の仕組み（文法）を学んだり語彙を覚えたりすることは思考力の訓練にはなる。「英語」あるいは「外国語」を授業科目として残してもいいであろう。しかし，それは，たとえば「国語」という科目を改編してその１部に組み込んでもよいかもしれない。科目名を変えればいい。外国語教師は，いなくなりはしないかもしれないが，今の10分の１，いや，それ以下に減らしてもかまわないかもしれない。

代わりに，「新たな」タイプの教師への需要が急増することになるであろう，というのが私の妄想の続きである。

携帯自動翻訳機を持ち歩き「世界に広がる」日本人旅行者や商社マン，あるいは国際的学会で活躍する研究者たちは，話せば話すほどますます広がるコミュニケーション・ギャップにやっとはっきりと気がつくであろう。外国語が話せなかったばっかりに観光やお買い物に命を燃やすしかなかった日本人旅行者は，今度は言葉を駆使して当地の人々とふれあい彼らの生活の中に入り込めば入り込むほどますます疎まれ拒絶され，不愉快な旅の思い出を残してしまう。変な訛がありかたことの英語を必死に操る日本人ビジネスマンの熱意にほだされ契約を結んでくれた外国人企業マンも，なぜか今度は冷たくあしらうようになった。意気揚揚と学会発表を終えた日本人研究者は，あとのレセプションの席では哄笑の的となる。やたらべらべらしゃべることがかえって仇となってしまったのだ。

考えるまでもなく，言葉が通じるということは必ずしも理解し合えることを意味しない。我々が日常的に痛感することではないだろうか。小泉内閣が発足して以来のことであるが，特に今この論をまとめているここ数日，田中元外相が絡む一連の出来事のおかげで国会中継がおもしろい。笑ってばかりはいられないが，議論する方々のすれちがいを聞いていると，言葉の最も広い意味での「文化」のちがいを感じる。この人たちはやはりそれぞれちがう「文化」を背負っているのだ。我々の会議などでも，日常の話し合いなどにおいても，同じことが起こっている。コミュニケーションを考える時には，やはり人間の生き方としての「文化」が大きな問題となる。生まれ育った地域のちがい，男女といった性別のちがい，これまで受けた教育のちがい，経済的立場のちがい，国籍のちがい，人種のちがい，民族のちがい…。様々な意味での「文化」のちがいが，我々のコミュニケーションの間に見え隠れしている。「同じ言葉を話している」という幻想を持ち，ましてや，「翻訳」という作業が介在していることを忘れさせてしまうような状況が広まるとすると，このような意味での「文化」について深く考え理解しようとする態度が必要となってくる。

ありふれた言い方をしよう。人と人とが話し合うためには，相手が何を思いどう感じているかを「読む」（理解する）ことが大切である。また，相手がどうしてそのような発言を

し，何のために話すのかを考えることが大切である。そして，同じ洞察を自分自身に対しても向けなければならない。「文化」を知る必要がある。あたり前のことを言おう。そんなことは，誰に教わらなくても誰もが皆それぞれにやっていることなのだ。誰に教わらなくたって誰もがしなければならないことなのだ。

ありがたいことに，新しいテクノロジーは新しい教育への需要を生む。携帯用自動翻訳機という便利な道具によって，ある意味では必要以上に膨れ上がったコミュニケーションの機会が，以前であれば誰に教わることもなかった「文化」への理解を教育する「新しい」制度への需要を生み出す。私は，とりあえず「語学教師」の皮をかぶってひっそりと英語を教えながら，やがて来るであろう「言語文化教師」への需要を待つことにする。

3．グローバル化した社会と言語文化と新しい教育制度

子供の頃，外人は皆英語を話し，日本人は皆彼らと会ったときには英語を話さなければならないと考えていた私は，戦後日本教育の悪い部分の申し子であろう。残念ながら，国際的に活躍するためには英語が話せなければならないという通念も，その教育の残骸であろう。英語を話せば国際人という考え方は，あきらかに，少なくとも２つの点で間違っている。世界中にもし英語を話さない人がいるとすれば（いるにきまっている），その意味での「国際」とは限られた意味でしかない。それに，国内で，しかもほとんど自室か研究室で考え出した理論がひょっとして（今では難しいのかもしれないが）国際的に評価される研究となるかもしれない。とにかく，ノーベル賞が国際的貢献の証だとしても（疑問ではあるが），その受賞スピーチをべらべらと英語でこなすことが国際人の証でもあるまい。

しかし，また，「私は日本語だけで勝負します」という態度や，ましてや，「俺と話したければ日本語を使え」という傲慢もいただけない。英語を話さなければ人でないと思う気持ちと同じである。とりあえず現実の自分と世界を見回してから考えることにしよう。

ちょうど今，アメリカのソルトレーク・シティーでは2002年冬季オリンピックが行われている。国際平和の象徴的行事ではあるが，オリンピックほどナショナリズムを高揚させる行事はあまりない。今回ほど「世界アメリカ帝国」を印象づけるオリンピックも珍しいが，オリンピックといえば私には東京オリンピックの開会式のことがいつも思い出される。

私自身その時の記憶はほとんどない。しかし，太平洋戦争に従軍し，お国のために死ぬ覚悟をした私の父にとって，その開会式での日本選手団の整然とした行進はまさに「日本」を象徴するものの１つだったようだ。父は，その後のオリンピックの開会式を見るたびに，「まったく，だらだらと行進しおって…！西洋式だか，自由主義だかなんだか知らんが，だらだらとだらしない行進は，実にみっともない！東京オリンピックの時には…」と繰り返した。とうとう一度も父に混ぜっ返すことはなかったし，今でも確認さえしていないが，あのぴったりと足並みを揃え膝を高く上げてする行進は，明治以降西洋式の軍隊制度を取り入れた日本陸軍の行進の仕方ではなかったのか…。大名行列は，あのような形でしていたのだろうか…。もしそうだとすれば，これこそ「西洋式」ではなかったか…。

私の「懐かしい味」のひとつは，確かに，コカコーラであろう。今ではビールばかりでほとんど飲むことがなくなったが，たまに息子から一口もらうと，やはり懐かしい。マクドナルドは今でも食べ続けているが，もし万が一，これから20年マクドナルドが食べられない状況に陥り，60を過ぎてからほんとうに久しぶりにビッグマックを口にしたとしたら，たくさんは食べられないかもしれないが，きっと「ああ，懐かしい…」と感慨をもらすだろう。「文化」とは，常に絶えず，混ざり合うものである。言語もそうであろう。カタカナが氾濫する日本語を嘆いて「堕落した」と言っても，その意味では，言語は常に絶えず堕落している。堕落こそ変化というものだ。

そんな状況の中で，「日本」を語るのに英語でできないわけがない。もちろん私は反対だが，極論すれば，英語が「国語」になったとしても，我々は我々でなくなるはずがない。たとえば，大英帝国旧植民地ナイジェリアの作家チニュア・アチェベ（Chinua Achebe）という人が，「アフリカ」を表現するにはアフリカの諸言語を用いなければならないという一種の「ナショナリズム」に対して，お仕着せであっても世界語としての英語を戦略的に使う意味は十分にあると主張するのも大いにうなずける。言語の強制は私の想像を超えるが，だからこそのアチェベの主張には迫力さえある。問題は「日本語」か「英語」かなどと選択を迫ることなどではない。どうせ「堕落」しながら変化している日本語を話しているのならば，英語と言わずどんな外国語でも身につけて「堕落」に拍車をかけようではないか。それがグローバリゼーションというものだ。

私は，私の父親の「国粋主義」を皮肉に懐かしく思う。人間はその気になればどんなものにだって「日本」を感じることができる。『古事記』から始めて日本の古典を読み漁ろうと思い立ったことがある。上巻の途中ですぐに挫折したが，序文にある安万侶の主旨ははっきり覚えている。曰く，これまで古き良き日本の伝統は幾世となく語り継がれてきましたが，わが国に正確に語り継ぐ技術がなかった故にどうもいいかげんになってきていたところ，このたび外国からの最新のテクノロジー（文字）を用いて記録に残すことにいたしました…と。日本文化ははじめから「舶来」なのである。日本人ははじめから「グローバリゼーション」の波に敏感であった。70を過ぎボケはじめた私は，孫が食べている見知らぬ食べ物に眉をひそめ，「おじいちゃんの若い頃には，ハンバーガーという由緒正しい食べ物をもっと大切にして食べていたものだ…」などと言い出すかもしれない。

話は再び回り道をしたが，私自身は，英語を学んでいて自分が自分でなくなる感覚，つまり，それまで自分が絶対だと思っていた考えがガラガラと崩れていく感触が好きである。その意味でも，つまり，自己のアイデンティティーなどというものを固定化せず，常に絶えず「堕落」していく自分の姿と付き合うためにも，外国語を学ぶことはおもしろい。それに，英語はなんと言っても便利である。この点では娘の考えと同じだ。私は，英語のおかげでいろいろな国の人と知り合うことができた。とりあえずはその波に乗ろう。

「言語文化」という言葉は，たまたま私が赴任した就職先の部局名に付いていたにすぎない。しかし，私は，結果的に，私が本論で述べてきたような「新しい」分野の研究や教

育を形容するのに，この言葉の持つ感触がぴったりであると感じている。「この言語を習得するには，コンピュータを用いた方法が…」といった意味での語学教育は，やがて大きく変容するであろう。「言語」という言葉は，この意味で，とりあえず「1週間でマスターする英語」や「自然に英語が話せる！」という標語とともに捨て去ろう。「文化」という言葉には，どうしてもある特定の文化現象をさす（伝統文化や外国文化や若者文化など）用法が付きまとう。われわれの生き方そのものに関わる言語や，我々の生き方そのものである文化を表すには，「言語文化」がちょうどいい。我々は言語文化を学び，言語文化を研究し，言語文化を生きるのである。

10 年後の，あるいはもう少し先のことであるかもしれないが，日本の学校教育の中心的役割のひとつを担うようになるのは，言語文化教育であろう。それがどのような形に進化するのかは想像だにできない。しかし，コンピュータ化が進み，人々のコミュニケーションがグローバル化すればするほど，「昔は誰もが当たり前にやっていたこと」に近づくことはまちがいない。ちょっとふざけた言い方をすれば「人と人とのお付き合い講座」である。

私はここまでずっと投げやりな，逆説的な，皮肉な物言いをしてきた。最後ぐらいは率直になろう。たとえいくら必要がなくなっても，語学教育は続けなければならない。もちろんいわゆる母語（母国語）教育は必要である。さらに，世界に複数の言語が存在する限り，いわゆる外国語教育は続けなければならない。そして，それは，通信情報技術の進歩とともに，私が述べてきたような「言語文化教育」に移行していかなければならない。

大学大学院といったいわゆる高等教育の場においては，翻訳機等の技術革新にともない，生きる上で必須となる語学と言語文化的思考を研究する専門の部局が必ずや必要となる。自ら語学力をつけようとする学生は，いまさらそろばんを覚えようと考える人が少ないように，ますます減少するからである。そして，数学的思考力がすべての自然科学の基本であるのと同様に，言語文化的思考力がすべての学問や生き方の基本だからである。

「英語」はもはや，しばしば使われる表現を用いれば，“englishes”という言い方でしかとらえられなくなってきた。かつて「シェークスピア」が英語教育の象徴であったのと同様，一部で今言われている「国際英語」という衣をまとった単なる英米中心の英語観（「アメリカ人のように，あるいは，アメリカ人と同等に，英語を話したい」という発想など）は，捨て去らなければならない。世界には小文字で表記すべき様々な英語がいくつも存在しており，さらに増え続けようとしているのだ。世界に存在する複数の「えいごたち」（englishes）は，特定の帝国主義的権力をうまく利用して世界に広がり，それぞれの地域の言語文化と結びつく形で生成している。言語文化の「グローバリゼーション」である。

そして，各大学大学院には，このような形の「えいごたち」と様々な地域の言語とをうまく結びつけた言語文化の専門的教育研究機関が必要である。娘はここで英語と中国語と言語文化を学ぶであろう。言語文化研究機関は，言語文化に対する理解力を養う子供たちから「世界に伸びる」商社マンや国際的研究者までの言語文化教育に責任を持つ部局とならねばならない。言語文化の研究は 10 年後日本の大学大学院教育の目玉となる。